

EPAインドネシア人看護師の滞日および帰還へのプロセス

——ライフストーリーより——

中 谷 潤 子[†]

The Process of an EPA Indonesian Nurse in Entering Japan, Gaining Employment and Returning Home — Based on a Life Story

NAKATANI Junko

1. はじめに

2008年にはじまったEPAによるインドネシアからの看護師候補者受け入れ事業も2016年で9年目を迎えた。来日し看護師国家試験合格をめざした候補者たちの予想外の苦戦で、日本語教育の分野では政策課題、そして国家試験問題の分析や対策などの研究がなされてきた。これらの研究をとおして、看護師候補者受け入れに対する日本側の在り方が強く問われてきたといえる。

EPAの看護師・介護士受け入れ事業は、インドネシアに始まり、その後フィリピン、ベトナムから受け入れが続いている。インドネシアからの看護師候補生は2015年までに547人が来日し、日本の看護師資格取得をめざしてきた。しかしながら、2015年度でも合格率5.4%と伸び悩む。2010年度の試験からは、「難解な用語や表現は言い換える」「難解と判断される漢字にふりがなを振る」「疾病名には英語を併記する」などの措置がとられ、2012年度試験からは、EPA看護師候補者の試験時間は一般受験者の試験時間から1.3倍延長し、すべての漢字にふりがなを付けた問題用紙が配布された。しかし、このような対応は事前に周到に検討されたものではなく、対処療法に近いものと言わざるを得ない。

そんな中、看護師候補者たちの日本での生活は月日を重ねていく。執筆者は、インドネシア人看護師候補者自身の人生における日本体験に関心を寄せた。EPA看護師候補者と

[†]大阪産業大学 教養部 准教授

草 稿 提 出 日 10月31日

最 終 原 稿 提 出 日 10月31日

いえ、一人一人はそれぞれが来日目的、日本語学習、日本体験をもち、ライフストーリーを築いている。しかしながら、個人の生の声は、先行研究ではあまりクローズアップされてきてはいない。看護師候補者たちは日本側の思惑の波にもまれているようにも思える。その中で、はたして何を考え、何を支えに日本で生活し、合格をめざし続けているのかについて、彼らの「語り」から知りたいと考えた。そして、2009年に来日した30代の男性看護師である協力者Aには、看護師国家試験合格前の2012年、合格直後の2013年、そして正看護師として就労して約1年後になる2014年とほぼ1年ごとに3度インタビューし、各段階での語りを収集した。Aの妻と3人の子どもは現在インドネシアにおり、日本に単身赴任している状況だといえる。

本研究ではこの経年的に行ったAへのインタビューをもとに、来日前から現在までの言語習得や異文化接触、そして日本での生活体験について語られたライフストーリーから、日本で生活者としてのスタイルを構築していく「外国人看護師としての自己の姿」を描き出そうと試みたものである。

2. 背景

本研究では、ライフストーリー・インタビューを行った。ライフストーリーとは、「生活史(やまだ:2000)」や「個人の伝記(桜井・小林:2005)」とされるライフヒストリーとは異なり、「英語のライフのうち、『人生・生涯』『生活』『生・いのち』『生き方・人生観』」の中の「語られた生の一部と経験としての生をライフストーリーとして見なすこと(やまだ:2000)」である。

ライフストーリーの「ストーリー」が示す「物語」として人生を捉えることは、事実や真実を問うのとは異なる見方をもたらすとやまだ(2000)は指摘する。「物語モードは、人が人に何かを伝達するのに適しており、物語が物語を生む、生と再生の生成的循環を生みやすい。」さらにやまだは、物語を語るものが語るものと語られるものとの共同産物であることも指摘する。「語り手と聞き手の相互行為から、ストーリーは生み出されるが、それはその場の状況的文脈によって変化する。したがって、語り手の物語は、語る相手によっても、場の雰囲気や状況によっても影響される。また、語り手と聞き手は、一方的な関係ではなく、対話的關係であり、共に物語生成にかかわる。(やまだ:2000)」そして、自己が「他者を媒介に生成される、あるいは本質的に他者を抱擁しているという考えは、現在の多くの哲学に共通する自己観(やまだ:2000)」であり、「語るほど、逆説的に、プライベートに閉じた『私』という概念が解体されて、自己が公共の場にひらかれていく(やまだ:2000)」のだという。したがって、協力者のライフストーリーとは、インタビュアーの前

で語ることで生みだされた「物語」なのである。

Aへのインタビューは、レストランや喫茶店などで行った。インタビュアーがインドネシア語での会話に不自由しないことから、協力者にはインドネシア語と日本語のうち話しやすいほうで話してもらった。初回インタビューは協力者が自分のことを説明するのはインドネシア語のほうが多かったが、回を経るごとに日本語の比率が増していった。インタビューでは、インドネシアで看護師を目指したときから現在（インタビュー当時）までを語ってもらい、協力者に了解を得たうえで録音し、それを文字化した。執筆者はその文字化資料をもとに、協力者のライフストーリーを作成した。なお、本文中の対話にあるJはインタビュアーのことで、インドネシア語の発話は日本語に訳し、斜体で表示した。

3. 看護師候補者Aのライフストーリー

3.1 合格まで

Aはジャワ島東部で育った。父親に看護師だと学校を出てすぐに一人前として働けるし、仕事も見つけやすいからと勧められたため看護師になった。看護師という職業については、以前インタビューしたインドネシア人看護師候補生（当時）は「家族の中に看護師が一人でもいるということはいいい（中谷：2003）」とそのステイタスについて言及していたが、インドネシア社会全体で、看護師に対して特にそのようなイメージが強いわけではない。Aは病院附属の看護学校で学び、卒業後は1年間その病院の一般病棟で働き、その後、地元を離れて就職し、ER（救急救命室）で2年間働いた。看護学校時代の同級生と結婚し、子どもも二人いたが、妻の勤め先は地元だったため、週末だけ地元に戻る週末婚であった。

看護師としての職場の大変さは、インドネシアも日本も変わらないと言う。それが日本へ来ることになったのは、経済的な問題がきっかけだった。2008年のEPA看護師候補生第1期の募集に妻とともに応募し、その時には、妻だけが合格して来日した。海外への募集があったらどこでもよかったというAは、日本に対しても特別な思いがあったわけではなかったという。ただ、民間の業者ではなく日本政府主導の事業だということで、信用できるといふ思いはあった。

妻からは日本での生活の大変さが伝えられたが、Aは翌年、再び応募し、妻と同じ系列の病院に配属されたため、子どもを両親に託して来日する。ところが来日後、妻は3人目を妊娠し、看護師試験合格への道を断念してインドネシアに帰国する。一人残ったAは、2012年の看護師試験に合格できず、2013年の看護師試験受験を決意した。結局妻は、日本で看護師資格を得ることができず、3人の子どもとともにインドネシアで生活することになり、家族は別々になってしまった。

2012年の試験の直前は、病院から毎日2時間半の勉強時間が定められ、職員も勉強につきそっていたようだ。Aは合格せず、尽力してくれた病院に対して申し訳なく感じる。しかし2012年の自己採点結果等から、病院に次回はきっと合格できるからと、3度目に挑戦することを勧められた。Aはもし次回合格したら、家族を日本に呼び寄せて、一緒に暮らしたいと考えた。

Aは病院で実習しながら看護師試験合格のために勉強していたが、まず、インドネシアと日本で看護師ができる業務の範囲が異なることに驚いた。例えば、患者が口から食べられなくて、鼻からチューブを入れることになった場合、日本では医者がチューブを入れなければならないが、インドネシアではそれは看護師でも行うことができるなど、日本のほうが看護師業務に制限があると感じた。

また、インドネシアでは、40-50代の患者が多かったのに対して、高齢者が多いことにも驚いた。それは、Aの配属先が高齢者医療を専門としている病院なので、当然でもある。日本ではこのような病院で人手が足りないのである。現在のインドネシアにはそのような病院はない。また、看護助手などの日本人スタッフの定着率が悪いとも述べる。A自身も寝たきり患者を動かすなどの慣れない業務で、腰を痛めてしまい、コルセットをすることになってしまった。

その頃の日本での生活での楽しみは、インドネシアにはない季節ごとの様々なイベントを体験することだった。また、日本で酒やたばこを摂取することが多いのは、自分の周りには日本の看護師を見てもインドネシアよりストレスが多いからだと感じた。特に日本の職場での勤務態度は、インドネシアに比べて厳しいと感じている。

(1)

A 外国人にとって、日本に来て、多分仕事をしたら、その、あの仕事には、ちょっと厳しくて、喋ってはいけませんと

J ん、喋ってはいけませんて？

A なんか、この間言われました。ちょっと友達、師長とか、あの、言われて、あの、ちょっと。冗談、仕事のうちは、冗談すぎ、とか、なんか、なんか、わら、わら。笑ってる時、ちょっと、声？が、出しすぎとか。ぎゃあぎゃあしすぎとか。それはちょっとうるさいから。はーって。まあ、私たち、もうわかってるけど、なんか文化的には違うから、この人はちょっと明るいから、日本、日本人はちょっと、でもここは日本から、ちょっとそれは、またこないだ言われました。

言葉の問題、そして業務範囲や勤務態度の厳しさに戸惑いを感じるAが、滞日を希望す

るその頃のいちばんの理由は、実は持病である喘息の発作が日本では出ないことであった。

(2)

J でも日本語とかの問題も何もなかったら、長く住みたいの？

A 住んでみたい。ここにしばらく住んでみたいと思う。なんだっけ、喘息？喘息、

J え、誰が？

A 持ってます。大体まいに、二日1回とか、毎日…

J 発作が出ます？

A はい。出て、薬も飲んで、それはちょっと辛かった。でも日本に来たあと全然

J ない？

A たぶんアレルギー。

J そうね、たぶん。

A 粉塵が実家は山に近いからか。それでたぶん、発症…。病気のことで、自分の国に帰るのが怖いなんて。

そのほかには、日々の業務や国家試験合格に関することばかりでなく、日本に来て、日本人や日本社会から得たものもあるという。インドネシアでは、良心や善行が宗教の教えに基づくのに対して、日本は信仰熱心ではない人が多いにもかかわらず、秩序やマナーが保たれていることをAは知る。そのことに驚きを感じるとともに、子どもには日本のこのような公共心の高さを教えたいと考えた。

3.2 合格

3年目は、国家試験合格に向けて勉強にもよりやる気を出すようになった。仕事と勉強のリズムは基本的に前年までと変わらないが、わからないことも同僚に直接聞いたほうがより理解できると感じたり、インターネットを駆使して、言葉の細かい使い分けを学んだりと学習スキルも身につけていった。

しかし、試験終了後は、自分ではあまり自信がもてなかった。自己採点もぎりぎりのラインだったため、発表が来るまで結果の想像はつかなかった。しかし、合格とわかったときは、嬉しかった。

(3)

J うーん、で、合格と分かった時は、どう思った？

A やっぱりうれしくて、もうやったー！みたいな。

合格には、インドネシアにいる家族も喜んでくれ、子どもも日本に行きたいと言った。しかし、合格してすぐの頃は、ちょうどそのタイミングで日本人スタッフがやめたこともあり、結局下の者がやる仕事をいつまでも担当していて、業務にあまり変化はなかった。他のEPA候補生が、合格したことで病院で新しく研修を始めるなどという話を聞くと羨ましく感じた。実はせっかく合格してもインドネシアに帰国してしまい、通訳をしたり、進学したりした友人もいた。しかし、自分は何年かは日本でやってみたいと思っていた。

合格しても、やはり一番大変なのは日本語だと感じる。試験に合格するためには、とりあえず理解できればいいが、業務では運用しなければならない。実際は寝たきりの患者が多いので、患者とのコミュニケーションはあまりないが、日々、同僚とのコミュニケーションや看護記録作成の際の日本語が難しい。

(4)

A 人間関係は、まあ、ちょっと、みんな、普通に、不安なのは、仕事

J あー、仕事。

A 多分技術はすぐ、多分1か月とか2か月とか点滴したりとかすぐ

J そうだね、今までやってたんだもんね。

A やってました。

J インドネシアでね、うん。

A すぐ戻りますね。やっぱりカルテの書き方とかそれぐらい、日本語、日本語がちょっと(笑)ちんぷんかんぷんです。

J その、カルテを読んだりしたら、わかる？

A あーほとんどわかります。

J あー、それはもうわかるんだ。

A ただ、自分で、あの申し送りあるんじゃないですか。朝の、聞いて、夜勤さんの、聞いて書くのはもう、やっぱり練習しないと。

しかし病院の仲間とちょこちょこ遊びに行っている。山登りをしたり、季節ごとに景色を楽しんだり、インドネシアにはない楽しみもある。

インドネシアの人は仕事でも冗談を言ったりふざけたりすることもあるが、日本人はやはり仕事の時は厳しいと感じる。それがストレスになることもあるが、だんだん理解できるようになった。

3.3 合格後

正看護師になり1年が経った。今では2交代制の勤務体系で夜勤もこなしている。やはり責任も重くなり、へろへろだと感じる。特に夜勤は少人数で患者を担当しており、なおかつ、高齢者などはいつ命の危険があるかもわからない。インドネシアでは経験がなかったことなので、大変だが、救急病棟での勤務もそれはそれで大変だったし、日々が平穩に過ぎると、今のほうが平和であるとも感じる。毎日の引継ぎも、何もなければ大体決まった内容で済む。看護記録を書くときは、片手にスマートフォンを持ち、調べながら書いている。書き方を注意されることもあるし、文章の流れなどはなかなかネイティブのようにはいかない。看護業務は「止血」や「剥離」など日常では出てこないことばがあるので難しいが、周りは親切だし、注意されるのも自分のことを思っていることだから、逆にありがたいと感じるし、人間関係はいいと思う。ただ、初めの頃はひどく緊張した。

(5)

A これもう、本当にもう、初めて、もう、大変でしたよ。もう、病棟に入っても、お腹
びりびり痛くなったりとか。

J ああ。

A カルテ、書くのは。

寝たきりの患者が多いので、患者と話をする機会はあまりない。45人担当しても、名前を呼んでくれてコミュニケーションできるのは1人か2人だが、患者の家族が来た時に、患者の様子などを話す。しかし色々と話していると、「おしゃべりばかりだ」と同僚に注意を受けてしまう。

しかし、仲良くなった同僚が家に招いてくれたこともあるし、インドネシア語やインドネシアのことに興味を持ってくれたりするようになって楽しくやっている。

インドネシアにいる家族を日本に呼び寄せたいはずと思っているが、なかなか実行に移せていない。子どもにとっても、たとえ数年でも日本の学校に通うことはいい経験になるだろうと思うのだが、手続き、住むところなど色々乗り越えなければならないことがある。家族とはLINEやスカイプで連絡を取っているが、離れている期間がどんどん長くなっていく。そのため、子どもの誕生日をつい忘れてしまったり、一時帰国したときに子どもが自分の前から逃げて行ってしまったり、少し距離を感じることもあり、悲しい。しかし妻もこの生活リズムに慣れてきて、最近では日本に行きたいとあまり言わなくなった。今後、長く日本にいれば、看護師として上の立場になるかもしれない。それは今よりもずっと大変だし、今でもストレスなのに、自分が日本語を使って下の立場の日本人を指導する

なんて考えられない。

(6)

A わたしあんまり好きじゃないですから、教えるの。

J (笑)。

A まあリーダーという。

日本では、飲みに行ったりすることでストレスを解消するようだが、お酒もあまり飲まないし、このような生活も少し飽きてきてもいる。家族がそばにいないことはやはり寂しい。

(7)

A 働いて、だから合格する前は、とりあえず。

J いっしょ、一所懸命。いつも勉強してたけど。そう。

A でも目標あって。

J 今はね。うん。

A でも合格して何するとか思いますよ。

帰国した人はたいてい医療に関連する分野の通訳などをしていると聞く。看護師より楽なうえに給料もいい。だから、日本に残っている人は帰国後の仕事のために、日本にいた間に日本語能力試験N2合格を目指している。しかし、これはこれで語彙や読解が難しく広範囲から出題されるため、難解である。Aも受験を予定しているが、むしろ自分にとっては看護師国家試験のほうが易しいと感じたりもする。

4. おわりに

本研究では、EPA看護師候補者として来日し、看護師として勤務したインドネシア人へのライフストーリー・インタビューをもとに、日本生活の軌跡を追ってきた。その結果、制度上の特徴や問題点に着目した視点からのみでは見えなかった、看護師候補者たちの非常に個人的な日本でのライフの形成が明らかになった。

Aの語りにもあるように、合格まではとにかく必死に勉強する。しかし合格後、正看護師として働きだすと次の目標が定まらないまま日々が過ぎていく。それなりに、日本での生活スタイルができていく中、これでいいのだろうか、いつまで日本にいたのだろうか、自問自答を繰り返し、答えがでないまま、日本に滞在し続ける理由も見いだせなくなってくる。日本でのネットワークの充実は見られるが、例えば、定住化の要因としてあげられ

る地域社会参加（依光：2005）や日本社会への帰属意識（外村：2011）はない。そして、さらなる定住化に向けては家族呼び寄せ、そして職場での責任的地位という壁があり、それを超えるか否かがキーポイントとなっていることもわかった。

実はAは2016年秋にインドネシアに帰国することになった。帰国前にインタビューをする時間は取れなかったが、「どうして帰ることにしたのか」と聞くと「どうしてかなあ」「また戻ってくるかもしれない」と言った。そこからは、帰国理由というより、滞在に対する強いモチベーションを保ち続けることができなくなったことが帰国という道を選ばせたように見えた。「また戻ってくるかもしれない」という言葉も、日本を離れる決定的な要因があったとは言えないことを象徴しているように感じられる。2016年9月16日の朝日新聞にEPAで来日した看護師や介護士の3割が帰国などでEPAの枠組みから外れたという記事が掲載された。一方で、2016年9月にインドネシアで、EPA看護師候補生への日本語研修を担っている日本企業の方と話す機会があったとき、帰国者の多くが定職につけないなどインドネシア社会に再統合できていないと聞いた。その方の話では、インドネシアに戻っても、肉体的にも重労働である看護師として再び働く意欲がなくなり、また通訳などとていのいいことを言っても、安定した収入が得られるわけでもなく、結局、経済的再統合がかなわない元看護師が大勢いるという。

日本に招き合格させたものの、その後定着を図れないということについて、日本側の責任は否定できない。さらに帰国しても、ステップアップすることなく、インドネシアの医療業界への貢献に至らないようでは、ますますこの政策に疑問を持たざるを得ない。

Aの事例を一般化することはできないが、折しも新聞記事でEPA看護師・介護士の帰国が話題になるなど、日本の外国人労働者受け入れ政策はまだまだ課題を抱えていると言いうことができる。本研究では、個人の語りに焦点を当てることで、一般に語られることのない「生の声」を届けようと試みた。しかし、それはそれのみにとどまらず、外国人労働者を必要とする日本社会への問題提起にもつながったのではないかと感じる次第である。

【参考文献】

朝日新聞「外国人看護師・介護士、難しい定着「もう疲れ果てた」」2016年9月16日
一般社団法人 外国人看護師・介護福祉士支援協議会：

<http://www.bimaconc.jp/beritaperawatan1604.html>（2016年10月22日アクセス）

厚生労働省：<http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000025091.html>（2016年10月22日アクセス）

- 桜井厚・小林多寿子(2005)『ライフストーリー・インタビュー』せりか書房
- 外村大(2011)「ポスト植民地主義と在日朝鮮人—帝国崩壊後の民族関係の変遷に注目して」
日本移民学会編『移民研究と多文化共生』御茶の水書房, pp.186-206.
- 中谷潤子(2003)「EPAによるインドネシア人看護師候補者の滞日決定要因—ライフストーリー・インタビューから—」『大阪産業大学論集』19:27-46.
- やまだようこ(2000)「人生を物語ることの意味—なぜライフストーリー研究か」『教育心理学年報』第39集. pp.146-161.
- 依光正哲(2005)『日本の移民政策を考える』明石書店